

土・牛・人を健康に マイペース酪農の営み

ルポライター

滝川 康治



拡大一辺倒だった酪農の反省を踏まえて、土・牛・人の健康を基本に、ゆとりのある家族農業を見直す機運が静かな拡がりを見せている。道東各地で開催中の「マイペース酪農交流会」の動きを軸にリポートし、本道酪農の現実と将来像を考える。

活気あふれる交流会場

11月中旬のある晩、別海町西春別の会館で、月例の「マイペース酪農交流会」が開かれていた。

30人ほどの顔ぶれは、搾乳作業を終えて夫婦そろって参加した酪農民を中心に、獣医師や農協職員、主婦、放送記者などと多彩で、地元のほか道東一

円からやってくる。交流会は、1ヵ月間の生活を振り返りつつ、簡単な自己紹介から始まる。

酪農民のなかには、乳牛の飼育頭数を減らして、経営の好転やゆとりのある生活につなげている人が多い。

「40頭減らしたら、エサ代も年間100万円時代に比べて半分かくらいになり、牛も元気になってきた。農協の組

勘(注1)も今までになく、いい数字が出ています」

「以前は追い込まれたような気持ちでやってたけど、拡大だけが酪農じゃない」という考えに触れて、未来が見えてきたし、牛飼いがおもしろい」

「夏はバイクでツーリング、冬はスノーモビルで山を走っている。もうけたお金で投資して、作業が増えるんじゃない。生活を豊かにするのが、経済

「根室管内では成牛12万頭に輸入穀物を22万トンも与えている。その分、粗飼料を食わなくなると故障牛が増え、我々は穴の開いた輸送缶を直すような仕事をしている。穀物給与を減らすことが糞尿問題の基本だ」(獣医師)

すると元気が出るよ」と励ましたけど、そんな営農形態を指導してきた人々に大きな疑問を抱いた、という。

「ボロノ雑誌を置いておいて、子供が悪いことをしたら、俺たちは情報提供しただけ」と聞き直っているようなもの。青年たちは後戻りできないだけに、無性に腹が立ちました」

立地条件や風土を軽視した規模拡大のひずみを象徴するような話が、わたしにはとても印象的だった。

糞尿問題でやりとりも

時計は午後10時半をまわり、ようやく自己紹介が終わってフリー討論に。農協の指導機関の職員を囲む形で、糞尿問題をめぐる白熱したやり取りが交わされた。

大規模化によって、糞尿が完熟堆肥として草地に還元しきれず河川を汚染したり、一部ではラグーンと呼ばれるため池に投入して地下浸透させる事態も生じている。法規制が加えられる日も近いらしい。堆肥を大地に戻し、自然と調和する酪農を実践する参加者にとっても深刻な問題である。



「マイペース酪農」の実績を発表する年1回の学習会(昨年4月。別海町内で)

的に良くなったことなのだと思う」

気持ちに余裕が出てきた様子が、言葉の端々からよく伝わってくる。

「この会では、最初は経営が語られ、最近は牛飼いの哲学を語っている」という言葉が、会の雰囲気をよく物語る。

女性の参加が多いのも特色で、家族の様子や暮らしぶり、農場での出来事、と話題も豊富だ。しばしば会場がわき、笑い声が響く。

三友農場に触発されて

き方を振り返り、悩みを共有すること、この地域の酪農のあり方を見直していく原動力になっているようだ。

この交流会の母体は、86年から年1回開催されている「別海酪農の未来を考える学習会」である。その活動のなかから交流会が生まれたのは、中標津町俵橋で循環型の酪農を営む、三友盛行・由美子さん夫婦(ともに48歳)との出会いによるところが大きい。

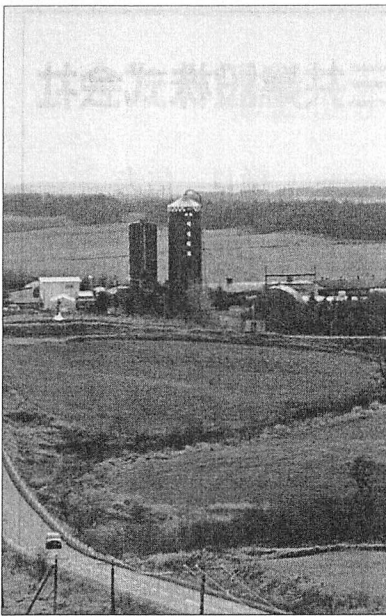
90年春、三友農場を訪れた会員たちは、自分たちより労働量が少なく、牛も健康で、しかも手取り収入は多い経営にショックを受ける。ちなみに当時の同農場は、40頭の成牛から年間210トンあまりの牛乳を出荷しており、放牧中心の低コスト経営で65%もの所得率を上げて、小さな規模ながらゆとりのある酪農を実現していた。

それが縁で、翌年の学習会で三友盛行さんが農民として初めて講演し、月1回の交流会が別海町内で開かれるようになった。

交流会の輪はさらに拡がり、現在は



月1回、4会場で開かれている交流会(浜中町姉別で)



巨額の補助金を投入した新酪農村。自由化の影響などで負債償還に苦しむ農家も多い

負債償還の条件緩和を求めて運動に奔走し、道庁に掛け合った経験もある。償還のために、乳量アップの限界へ挑戦を試みた時期もあった。近年は、分業による大規模経営の維持を考えるようになった。

マイベース酪農とは対照的な経営のように映るが、相和さんは、「三友さんとは志は同じだが、現実的な経営実態はかけ離れている。簡単に後戻りできないんですよ」と強調する。

早朝5時半から約4時間、それに午後3時から4〜5時間、搾乳やエサやり、もろもろの管理作業が切れ目なくつづく。夏場は、牧草の収穫作業

に加わる。この地域では普通に見られる労働の姿である。

「夫婦で年間7000時間は働いている。経費でミックスされる分を入れて生活費は600万円くらいかな。農協職員の平均給与は約620万円。こんな労働はなかなかないよ」と苦笑する。相和さん夫婦が農協職員だったら、いくらの給与になるのか、労働時間を基にあとで試算してみた。2000万円前後にはなる。所得の多寡だけでは推し量れない部分もあるだろうが、報われない仕事である。

わたしの生家も牛飼いだっただけで、生き物相手の仕事の苦労は肌で知って

いる。企業戦士の過労死は社会問題になっても、酪農家の過重労働が話題にのぼることは少ない。過労死しかねない長時間労働になんとか耐えているのは、自然と動物に接して働く家族農業の良さと、経営者としての矜持があるからなのだろう、とつくづく思う。

牛肉自由化の影響は、数年前のピーク時には1頭平均28万円ほどだった个体販売価格が、最近では5万円台にまで低落している、と相和さんは言う。

JA中標津の組合長として本州方面に牛を売り込む三友さんは、「個体販売は国際価格の時代になったことを自覚すべきだ」と話していたが、急激な国際化が歴史の浅い酪農地帯に深刻な打撃を与えている。

新酪農村では減収の度合いは大きく、相和さんのところは、「年間70頭くらいは売れるから、ピーク時に比べると1400万円くらいの減収だろう」

努力家の相和さんは仲間とともに、酪農を志す東京方面の若者を募集して独自のヘルパー制度をつくったり、牧草収穫の受委託事業によって徹底したコスト削減を図り、活路を見いだそう

しながらも、1戸平均で6800万円（道農政部調べ）もの負債残高を抱えているのが現実だ。

同町奥行の新酪農村で乳牛150頭（うち成牛は90頭前後）ほどを飼う相和さん（51）は、JA別海の理事も務める地域のリーダーである。西春別の交流会に先立ち、高橋さんと一緒に話を聞かせてもらう機会があった。

奈良県のお茶屋の次男坊で、東京都内の大学を卒業してアメリカのミカン農家へ実習に入り、帰国後は国際農友会で働いた。70年代初め、公害問題がクローズアップされた時期で、「近代化されない農業をやりたい」という一心から北海道に渡る。奥さんとふたりで町内の農家で実習後、73年に近くの離農跡地を買って入植した。

「もつと個性のある生き方をすれば良かったんだが……」

と、ちよつと悔やむこともあるというが、新酪農村に入植せざるを得ない事情もあり、76年に現在地へ移転。農用地開発公団による事業費の受益者負担分は、資材の値上がりなどで4800万円ほどに膨れ上がっていた。

としていた。

「支援システムを確立させて、労働を軽減し、人間らしい酪農をやりたい。とにかく自分たちで解決していこう、って考えているんです」

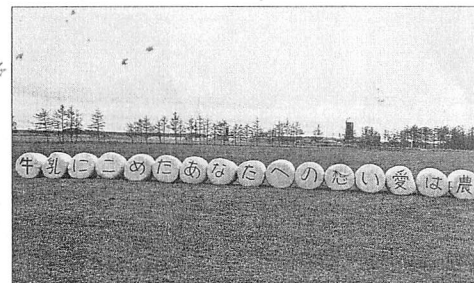
ひたむきに生きようとする相和さんに暗さはないが、半面、それは家族農業と訣別する道でもある。分業化を推し進める酪農によって、はたして本当に人間らしい暮らしができるのだろうか……。話を聞いていて、わたしはなんだか切ない気持ちになっていた。

分業化によって大型酪農を維持する生き方と、「縮小も選択肢」を合言葉にマイベース型を追求する生き方——そのどちらの流れが、道東酪農と地域社会が生き残る道なのか。

交流会に向かう車中で高橋さんが言っていた、「結局、糞尿問題がネックになるんじゃないか」との言葉が、ヒントを与えてくれそうだ。（つづく）

*注1 北海道の農協独自の信用制度。年度当初に営農計画に基づいて貸付限度額を設定し、その範囲内で農家資金を自動的に受け入れ、引き落としする一種の貸越制度。

*注2 牛を保留しない方式の牛舎で、搾乳作業は別室のミルクングバーラーで行う。先進技術のひとつとされるが、労働時間や糞尿処理などの面で問題点が指摘されている。



「ゴールなき拡大」の限界を超えた道東の酪農地帯

別海町2カ所と浜中町、厚岸町の計4会場で開催中。その集大成ともいえる春の「学習会」では、昨年から参加夫婦による事例発表が行われている。

「別海はパイロットファームや新酪農村と、農政に振り回されてきた。そうじゃない、自主的な農業のやり方があるのではないかというのが、僕らの主張です。食料のことをみんなで考える時代になってきたという客観情勢も影響していると思う」

と、学習会の事務局長で獣医師の高橋昭夫さんが、農民自身が語り始めた

背景を説く。技術研修の場はどこでもあるが、身近な経営と生活を語り合い、問題解決の糸口をみつつけようとする集まりは、道内でも数少ない貴重な取り組みである。

適正規模で健全な経営

数日後、わたしは浜中町の交流会会場を訪れた。20人ほどの参加者のなかには女性が少なく、別海と少し違った雰囲気を感じる。数人の農業共済組合職員が事務方で協力しており、交流会が始まって2年目になるという。

テーマは「組助。助言者の三友さんが、自らの過去10年間の組助収支をひもときながら、飼料給与と堆肥づくり、資金返済のポイントなどを説明することから始まる。司会者も資料を手にした様子を、つぶさに紹介した。

心に残ったのは、頭数を増やすぎで労働過重に悩み、マイベース型の酪農に活路を求めようと初めて訪れた青年に、適正規模に戻すための処方箋を熱心に伝えている姿だった。

91年春の牛肉自由化の影響で、個体

販売部門の低迷がつづいている。減収を穴埋めするために牛乳生産を増やすと、今度は冷夏などによる伸び悩みで生産制限。ダブルパンチである。

無理な規模拡大をした人ほど青息吐息なのが、最近の本道酪農の現実だ。それだけに、この青年のようにワラにもすがりたい気持ちの酪農家は少なくないだろう。

酪農もバブルの時代が去り、いきなり国際競争の荒海に放り出されてしまった。そんななかで、規模は縮小しても健全な経営ができそうな「マイベース酪農」に、期待が集まる時代の流れが確かにある。

新酪農村でつづく模索

農家一戸当たりの土地面積が約50haに達する別海町は、大型酪農のメッカとして知られる。

「ゴールなき拡大」は、生産量を飛躍的に増大させたものの、多額の負債と農民の過重労働、環境悪化を生んだ。同町を中心に20年前にスタートした新酪農村事業では、1戸当たりの牛乳生産量で全道平均の2倍近い数字を記録

しながらも、1戸平均で6800万円（道農政部調べ）もの負債残高を抱えているのが現実だ。

同町奥行の新酪農村で乳牛150頭（うち成牛は90頭前後）ほどを飼う相和さん（51）は、JA別海の理事も務める地域のリーダーである。西春別の交流会に先立ち、高橋さんと一緒に話を聞かせてもらう機会があった。

奈良県のお茶屋の次男坊で、東京都内の大学を卒業してアメリカのミカン農家へ実習に入り、帰国後は国際農友会で働いた。70年代初め、公害問題がクローズアップされた時期で、「近代化されない農業をやりたい」という一心から北海道に渡る。奥さんとふたりで町内の農家で実習後、73年に近くの離農跡地を買って入植した。

「もつと個性のある生き方をすれば良かったんだが……」

と、ちよつと悔やむこともあるというが、新酪農村に入植せざるを得ない事情もあり、76年に現在地へ移転。農用地開発公団による事業費の受益者負担分は、資材の値上がりなどで4800万円ほどに膨れ上がっていた。

土・牛・人を健康に マイペース酪農の営み

その二

滝川 康治



「拡大神話」に振り回されてきた酪農のあり方が問われている。過重労働から解放された夫婦、適正規模で経営をつづける農家、現場の獣医師、行政担当者などの声を聞く。

転換で生まれたゆとり

厚岸町太田地区で70頭余りの乳牛を飼う石沢元勝（44）由紀子（38）さん夫婦は数年前、拡大路線から経営を大きく転換させて、生活にゆとりを生みだしている。

かつて軍馬の供給地だったこのあたりは、戦後、酪農が本格的になったと

いう。元勝さんが家業に就いた70年代初めには、15頭ほどを飼っていた。

それから20年余り、酪農雑誌を熱心に読みあさり、技術講習会があれば駆けつけて、大規模化の道をかけのぼる。ピーク時には、43haの土地で100頭以上の牛を飼い、労働時間も増えるばかり。「規模拡大こそ経営向上の決め手」という神話を信じて疑わず、乳量アッ

プに血道をあげてきた。

91年5月、転機が訪れる。友人に誘われて「別海酪農の未来を考える学習会」で聞いた三友盛行さん（現JJA中標津町組合長）の話に衝撃を受けた。

当時は、牛舎から戻ると夕食は9時すぎ。待ちくたびた子供たちが眠そな表情で横になっていた。末っ子が情緒不安定になり、石沢さん夫婦も心

なによりも、過重労働から解放されたことの喜びが大きい。

「かつては牛舎の仕事だけで、ひと年間3400時間は働いていたけど、今は2200時間くらい。余裕が生まれて、自然に依拠した農業という意識になってきた」

という元勝さんは、環境問題にも関心を向けて、町内の自然保護グループの代表として発言をつづける。

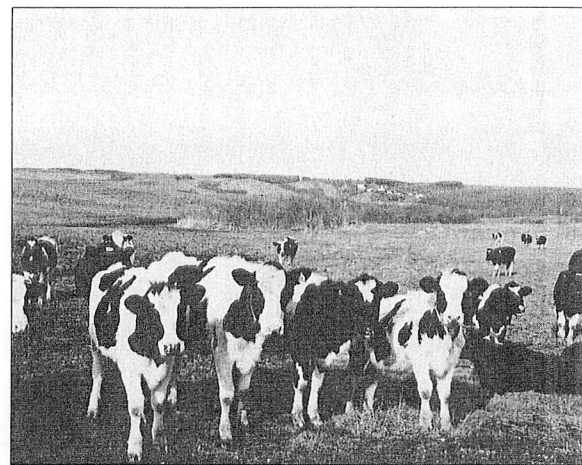
「以前は牛舎の仕事が8割近くを占めて、それが当たり前みたいでした。今は時間的なゆとりができ、家事や子供たちとの交わりすべてを含めた生活を考えるようになった。1頭でも多く乳を搾ればいい」というのが男の論理。

前は「そうかなあ」と思っていたけど、最近は「違うよ」と言える自信ができた。女の人は（マイペース酪農に）すごく関心をもっていますよ」

女性の視点から、由紀子さんが価値観の変わりようを話す。

将来を展望しても先細りになる感じはしない、と二人は力を込める。

「マイペース酪農は、経費を減らしてもうける酪農とは違う。土と草、牛の



大規模路線のひずみが顕著な別海町の酪農地帯

健全な循環のなかで営まれる酪農によって、人間も健康になれる。そのことで心豊かな人生を送れる——と、理解しているんです」（元勝さん）

石沢さん夫婦は、一気呵成に規模を縮小して「健康」を取り戻し、ゆとりある生活を生み出した好例だろう。それは20年前に多くの酪農家がやっていった経営でもある。規模拡大の神話が幅を効かす現場では少数派だが、わたしは共感をもって話を聞いた。

風土から学ぶ草地酪農

中標津町俵橋の三友農場は、「マイペース酪農」を実践する人たちの拠り所になっている。

東京出身で高校の同級生だった三友さん夫婦は、67年に結婚して別海町などに実習に入り、翌年、現在地に入植した本道最後の開拓農家。借金返済のため生産に励み、規模拡大を当然と考えて、80年代初めには多額の負債を抱える——という、多くの酪農民がたどった道を歩んだ。その後、自分たちの適性に応じた規模で、自然の流れのなかで営む酪農へ転換を図った。

「風土から学ぶ持続型の草地酪農」という言葉が、三友農場の牛飼いの哲子をよく物語っている。

牛は放牧を中心に、冬場は乾草主体で配合飼料を適量与える。完熟堆肥を畑に還元し、草地の更新はしない……と、指導機関がもてはやした、輸入穀物飼料の多給によって乳量増を図る路線と対照的な経営をつづけてきた。

「あの夫婦は、昔からバイタリティーがあって、粗末な牛舎で乾草一本の牛飼いをやっていた。家族そろって遠出をしたり、川で遊んだり、ともかく金をかけずに生活を楽しんでいたよ」

70年前後に三友農場の隣で肉牛飼育などを手がけ、のちに道北の町に移り、今は野菜農家をやっているわたしの友人は、こんなふうには述懐する。家族農業を基本に、田舎暮らしを楽しむという同農場のスタンスは、昔も今もそう変わっていないようだ。

「根室酪農はあまりに人為的すぎ、農民の経験や知恵を無視してきた。人間の食料にならない牧草を、家畜によって作り替えるのが本来の姿。そこから遊離した穀物多給の形態は、地球規模



一気に規模を縮小し、生活にゆとりを生み出した石沢さん夫婦（厚岸町太田で）



実践の拠り所になっている三友さん夫婦（昨年春、別海町内）



環境保全の視点から、穀物多給に疑問を投げかける獣医師の岡井さん

「マイペース酪農の取り組みは北海道酪農の安定した発展を図るうえで有意義なこと、環境に調和したゆとりある経営の確立は、今後の望ましい姿のひとつと考えております」

昨年10月の道議会予算特別委員会、答弁に立った武田善行農政部長は、一部酪農家の実践をこう評価した。

行政側にも見直し機運

岡井さんが酪農家・消費者双方に送るメッセージである。環境保全型の農業を基本にすえた地域づくりに、多くの示唆を与えてくれる言葉ではないだろうか。

道農政部は、北海道酪農・農村のめざす姿」と銘打った独自プランの策定作業をすすめており、詳細は3月に発表される予定。国の指針とは別に、代表的な家族酪農の姿として次の3つの経営類型を示す意向である。

①40頭搾乳／自然条件を上手に利用

国の農政審議会は昨秋「新農政プラン」の酪農版にあたる10年後の経営指針をまとめたが、それは「北海道では搾乳牛80頭の経営規模（現在は30頭余り）をめざす」という、相変わらずの拡大路線を踏襲する内容である。「中小酪農の切り捨てにつながる」と、現場の反応は冷やかだ。

して、あまり大きな施設投資をしないマイペース酪農型。

②60頭搾乳／恵まれた土地条件や家族労働力が豊富なケースで、既存のやり方から簡便なフリーストール方式。

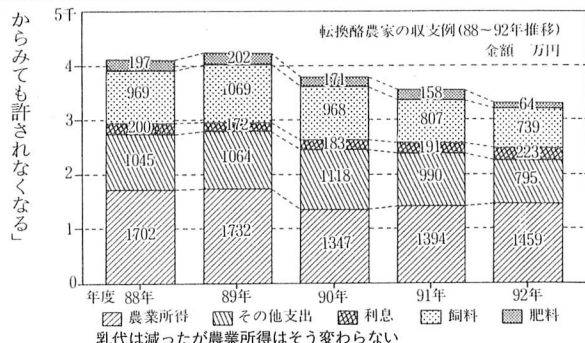
③100頭搾乳／資本装備の大きなフリーストール&ミルクングパーラー方式。

この類型化は、規模拡大を推奨してきた道の内部で、ようやく見直し機運が高まってきたことを意味する。

「エレガントな経営のやり方として、個人的にはマイペース酪農は正統な道だと思ふ」

と話すのは、道農政部酪農畜産課酪農振興係長の東修司さん。酪農を志す人のなかには、これまでビジネスライクな見方が強かったが、最近経済至上主義でない暮らしや経営を重点にする人が増えており、行政にもそれが反映してきた、という訳である。

確かに従来のやり方を反省する動きが加速されているが、日々の仕事に追われる酪農地帯では、まだまだ「拡大神話」が根強い。規模縮小には勇気がいるし、マイペース型の酪農民が変



穀物多給が招く環境悪化

「三友さんも交流会のなかで、『農協も適正規模を言うようになり、少しずつ風向きが変わってきた』と言っていたが、拡大路線への反省は徐々に広がる兆しを見せている。

「マイペース酪農交流会」の事務方を支える、獣医師の岡井健さん（根室地区農業共済組合中西別支所次長）は、別海町に暮らして20年余りになる。診療現場では、規模拡大のひずみが牛の疾病によく表れている、と指摘する。

「起こっている一番の問題は第四胃変位という病気、ある地域では分娩頭数6000頭のうち2000頭が手術をした。胃潰瘍になっている牛も結構いるし、乳房炎もすごく増えている。こうした疾病の多発は牛からの反応だと思ふ。これは共済組合も困っているんです」

と、表情をくもらせる。長年、野鳥観察をつづけているが、「ここ数年、ヒバリやオオジギなど草地のミミズを食べる野鳥の減少が目立つのは、土壌の無機物化が原因じゃないか」と、土

が病んでいる現状を憂慮する。

岡井さんは、外国産の飼料穀物に頼り、農地の許可範囲を超えて多くの牛を飼う酪農のあり方に、環境保全の視点から疑問を投げかける。

牛の糞尿や肥料に起因する硝酸態窒素の数値が高くなっている実態（本誌1月号「補助事業を流用する西別川取水計画の内実」参照）や、新酪農村の下流にある風運湖の大腸菌濃度の高さが漁業団体の調査で明らかにしたことなどを見ても、すでに深刻な環境問題が起きている。

岡井さんらの概算によると、根室管内に入ってくる配合飼料は23万トン、肥料が4・3万トンで、出荷される牛乳66万トンと牛の個体販売分を差し引いた、河川への窒素流出量は約3000トンもの膨大な数字になった。

「もともと酪農に『糞尿処理』という言葉はなく、牛と大地の間を循環していた。穀物の給与量を減らし、草地面積に応じた飼養頭数にとどめれば、窒素循環の釣り合いがとれるはず」

と、環境保全の原点に戻ることの大切さを強調する岡井さん。そのために、

次の経営転換の方法を提案する。

①育成牛の比率を成牛の15〜20%まで減らす（注）現状では、同数程度を飼う農家も多い。

②一乳期（10カ月程度）2トン以上の穀物を与えない。その半分くらいがいい。

③自分の能力や経済力、体力などを考えて、頭数や草地面積を適正規模にする。

「消費者は、青空の下で放牧場の草を食べる風景をイメージして牛乳を飲んでいる。その牛乳生産の半分のカロリーを輸入穀物に依存し、酪農が環境を破壊しつつある現実を知ったとき、どうするのだろうか。」

「百姓の目」で農業の基本を見直し、大地や農家、家畜にやさしい農業をめぐむことが問われている。家族と過ごす時間のゆとりを持ち、自家生産物を口にして、地域のつながりを培う農村文化を継いでいくことが、次の世代を育くむことにもなる。国民一人当たりのGNPが日本とはほぼ同じノルウェーでは、酪農家は「平均13頭を搾乳していることを知ってほしい」

人扱いされる風潮もある。

行政側からきめ細かな「誘導」があれば、もつとスムーズに適正規模の酪農に戻せるのではないかと、このころ、わたしの受けとめ方である。

「20年間、規模拡大を指導してきた、舌の根も乾かないうちに、小さくしたいよ」とは言えないところがある。行政としては、議論をやり、多様な道を支援していきたい。話題提供や提案の形で（マイペース酪農の）優良事例を紹介し、あとは農家自身が経営をつくる——という方向でないと、元の木阿弥じゃないか。ただ、環境汚染の縛りがかかってくれば、全体がマイペース型のような方向に行かざるを得なくなるんじゃないだろうか。」

東さんは、行政担当者としてのジレンマを語り、多様な支援策をすすめるうとしていた。

酪農の規模拡大の軌跡は、高度成長からバブル破綻に至る社会のひずみを映し出す鏡でもある。「土牛・人を健康に」を合言葉にした実践は、心豊かな生活とは何なのかを、生産者・消費者双方に問いかけている。